1976年1月1日発行

女性解放とコミューン

新しい地平

1976年
No. 9
定価1部 150円

発行 市民に権利の回復を／市民連合 〒171 東京都豊島区池袋3-1555 発行人 富山妙子 編集人 三宅義子

■特集・女・仕事・家事・子育て
■高度経済成長と被差別部落の女たち

孔雀　イランの職人芸術より

天皇制は男文化のシンボル

大新聞や放送局が、これほど権力に弱かったか――男のフガイなさを痛感したのは昨年の天皇の訪米、初の記者会見である。

天皇は戦争の開戦に反対し、終戦を決断し、都合のよいことはすべて朕。

戦争責任を追求されれば「そういうコトバのアヤについては、文学方面は研究していなくて……」と珍問答。これが大臣の答弁ならたちまち反撃、退陣へ追いこむであろう新聞記者たちも、保身を考え、社の立場を考えて沈黙。

「天皇は象徴」であるという、わけのわからぬコトバのアヤは、「天皇は支配権力の象徴」という意味だったのか。日本株式会社の階級、身分差別、民族差別、部落差別、女性差別のヒエラルヒーの頂きに天皇がいる。

その天皇家の皇室典範には、女は皇位継承権がないというから、これまた男女平等にもとる、女性差別の世界である。

そして、女にとって家父長制のシンボル、差別の権化である天皇夫婦が「国際婦人年記念日本婦人問題会議」に出席したのだから、全くオカシナ話である。

ひたすら立身出世のため、非合理も、非論理もあいまいにしてしまう男とちがって、女こそ明快なる論理を打ち出そう！

女・仕事・家事・子育て

特集号

「国際婦人年世界行動計画」も，男女の役割分担を変えてゆこうと謳っているが，現在日本の女たちのおかれた状況は……

戦後民主々義の一時期、男女平等のきざしがみえたが、それも六〇年安保の敗北により、資本の攻勢が強まると、ふたたび女は家庭にもどるようしむけられてしまった。

封建的な家制度に代って核家庭のマイホームが、より巧妙に、女を男の経済的な依存者となるよう役割分担を固定化させてきた。それは「高度成長」と、出世欲をあおりたて「モーレツ社員」を出現させ、企業はマイホームを遠隔操作しながら、そこを「社宅化」した。

そうしてつくられた核家庭は、資本の目的にみあっていたし、家父長制文化で育った男の意心地よさとして、女にとっては「三食ひる寝つき」の安楽椅子として、GNP第三位の日本株式会社を支える一単位になってきた。

しかし一方で戦後の開かれた教育の成果として、また組合運動や市民運動を通じて、社会的な眼をもった女たちは数多い。その彼女たちが経済的にも自立し、仕事をもって生きようとする欲求は、人間として当然のことなのだが、女の経済的自立という女性解放の第一歩でさえ、実現はむずかしい。働く女たちのほとんどが、家庭をもてば出産、育児、家事といった生活負担のなかで、日夜悩みつづけているのが実情である。

いったいこの問題を切り拓く突破口はどこにあるのか、女と仕事について、みなさんと共に考えるため、つぎのレポートを紹介し、この問題を煮つめていただきたい。

職場・夫・三人の子と私

奥山　時子

教師と妻と

私はいわゆる母親教師。東京の下町、江戸川区立のある小学校につとめている。

教師になることは小学校時代からしだいにかたまってきた夢であり、高校、大学の勉強の目的でもあった。

大学二年のとき迎えた安保闘争の渦中で、社会的にどう生きるかを問い直し、教育という仕事の意味をつかみなおし、あらためてそれを生き方として選びとった道であった。

そうやって教師になって、今年で十三年目、もうやめようかと思う時も何度か、教育界に絶望したり、自分がいやになったりしたがともかく、いまはよくぞ教師を選びけり、としみじみ思う。

仕事はたいへんだが、子供たちの可能性をのばすという教育の仕事は、おもしろく、私の生きがいである。長い現実との苦闘のなかで、主体的にかちとってきた私の財産である。

ところが私には三人の子供がいる。六歳の男の子、四歳になったばかりの女の子、今春生れたばかりの男の子である。

夫は繊維関係の会社員。私どもには同居してくれる親もなく、親せきは大阪や広島とぜんぶ遠い。彼は仕事のやり手であり、とても忙しく、夜の帰宅は九時から十一時となる。彼は三年前に大手の商事会社をやめ、やめた仲間を中心に新しい会社をつくったが、中小企業でこの不況 ― もっとも好況の時だって帰宅は遅いのである。

こんな状態だから、結婚は共同生活の場で、お互いが自立した個として社会的仕事をもち、対等な関係を育てようと確認して出発した私たちのはずなのに、家事、育児のほとんどを私が背負う形でやってきた。

これだけでも納得できないのに昨秋三人目を妊娠して以来、夫が私に仕事をやめろといい出し、私を深い悩みにつきおとした。

前年に私が二度も体をこわしたこともあって、これで三人目の赤ん坊を育てるとなると、私も自分も両方だめになるというのである。男が生活を支えているのだから、条件がない限り、女が働くのはす

べてを犠牲にする。何も教育運動は教師でなくともできる。家でやれることをすればよいと。私はやめたくない――そこで毎晩夫婦げんかがつづいた。

私にとって仕事は、私そのものだ。夏休みや産休があるから主婦生活も知っているが、楽ではあるが、充実感は比べものにならない。

私は自分一人でも生きてゆける自立した道を捨てたくはない。なんのためがんばってきたのか。男は悩まず、やめろといえる男女の人間関係は何かと思いはじめた。

わたしの状況

私の現在の生活。ひと口でいえば十七時間のぶっ続け労働である。

朝五時か五時半、遅くて六時、赤ん坊がグズグズいい出す。おむつを換え、授乳、着換えをさせる。

朝食の用意。保育園に行く二人の子の弁当つくり。夫と子供を起して身支度と食事。ふとんをあげるのは三人目を生んでやっと彼がやるようになった。

小さい子供がいて朝早く、きまった時間に家を出るのは本当にむつかしい。こちらが早く起きても思うようにいかず、つい「早くして」とおこす。すると彼は時々いうのだ。「君が働いているから、子供だっておこらなくていいところをおこるようになる」と。

七時半（育児時間のとれる日は八時十五分）、車を動かして荷物をつむ。通勤途上、まず車で五分位の保育園に上の子二人を預け、もう少し走って赤ちゃんをある個人の家に預ける。ほんの一カ月前ぐらいから夫も同乗するようになったが、それまでの五年間、私一人で運転し、子供二人を車で一時間もかかる遠い保育園に、つれていっていた。

保育園が遠いうえに、朝のラッシュで、早く目を覚してくれない子供のため、朝食は弁当をつくりギリギリまでねさせておいて、おとすとすぐ車にのせ、車中で顔をふかせ、朝食を食べさせながらであった。

まだ二歳の子は途中で、ハンドルと私のあいだに「だっこ」とわりこんできて、運転ができなくなり、遅刻がわかっていながら道端に停まって、泣くのをなだめもした。朝、一日でも彼がつれていってくれたことはない。あるとき研究会に出かけるため、保育園のあく時間まで待っていられないから頼んだことがあるが「自分のすき勝手なことをずるのに、おれの仕事を犠牲にするのか」とけんかになっただけであった。

さて、駅で彼をおろすと、ラッシュで車はノロノロ。またも遅刻か――信号のかわるにもイライラし、学校にとびこむ。

早い先生は十五分も、二十分も早くきて、教室をみたり、事務をかたづけたりしているのに、職員の打合せが始っていてガラリと戸をあけるのは、もう慣れているものの、つらいことだ。

小学校というところは、息つくひまもないほど忙しいところである。朝ゲタ箱をあけて夕方ゲタ箱をあけるまで一杯のお茶もゆっくり飲めない日がほとんどだ。一日五～六時間の授業は全部内容がちがい、休み時間にはその準備や後始末、印刷、校務分掌（私は図書館の司書みたいな仕事）で走るように歩き、集金その他の雑用や会議の多さ、子供のけんかやケガなどで、ついにトイレに行けなくて、授業中我慢できなく抜け出すという時もある。十七時間労働といったって昼休みがあるではないかと思われるかもしれないが、食事時間は、休息にはならない。なぜなら、昼は四十一人の子供に食べさせながらであり、朝夕は我が家の子に食べさせながらであるからで、早く他の仕事を処理する時間を作ろうと思うから私にとっては食事も労働である。

だが、いまはまだよいのである。遠い保育園から、この近い保育園に入るに当っては、申請して一年半もかかり、通園時間の長さから子供が健康を害し、たまらなくなって暇を作っては、役所や、そこの保育園に何度もじか談判に行ったり、しまいには一面識もない議員にまで相談し、入れるよう運動したのも私であった。

赤ちゃんを預ける所も、妊娠と分かった時から手を打ち、妊娠四カ月頃から頼んで決っていた近所の方にもうすぐ産休あけという時断わられ、目の前がまっくらになったのを憶えている。それが七月だったので、夏休みまでは隣の奥さんに頼みこんでみてもらい、今年の夏休みは、それこそ田舎にも行かず、預け先を探し回った。役所はいうに及ばず、近く遠くの保育園、八百屋さんや医者、保育園の先生から、あそこはどうかしらと教えていただいた個人の家と数えてみれば十六軒目に、保育園の父母の会で声を出して紹介して下さった家をたずねて、やっとみつかった所である。よい所がみつからなければやめなくてはならないから、いく度かもうだめかと思いながらもくじけずに探し回った執念で、本当によい方が探せたのである。彼は最初に決っていた所に挨拶をしにいってくれたのと、家政婦会に電話をかけてくれただけであった。

男女のギャップ

四時半に学校を出て、まず赤ちゃんをひきとり、それから保育園で上の二人をひきとるのだが、毎日きまった時間に、必ず仕事を打ちきらなければならないのは、朝以上につらい。

彼の勤務時間は公式上、五時十五分となっているから、時にはできそうなものだが、彼はいう。

「時間どおりに帰るやつなんかいない。そんなことしてたら会社がつぶれてやっていけないよ。そこが公務員とちがうところだ。公務員は気楽でいいよ」といって、送迎の分担については問題にもしない。

彼は自分の仕事、ないし誰かと話したり、飲んだりすることについて、夕方、子供や家のことで自由を束縛されることはない。しかし、こちらは母親であるから、当然だというわけだ。私とてやりたい仕事、やらなくてはならない仕事を残し、それができないために明日の授業が惨たんたる結果になることも気にしながら、友人と話す暇もとれず、出たくてたまらない研究会にも参加できないのが残念だ。

そのくせ、たまに学芸会などの準備でどうしても遅くなって、保育園の先生にも迷惑をかけ、やっともどった家で遅い夕食を食べさせていると、たまに八時頃帰ってきて「なんだ、今頃食べさせているのか。かわいそうじゃないか」となじるのだから涙も出る。

その点、男は気楽なもので、そういう思いで帰ってきて、夕食もつくったあと「今日は○○へ出張するから、今夜は帰れない」などと電話一本で一方的に通報してくる。ところが、私がたまに（年にほんの二、三回）合宿研究会に行きたいといい出すと、たいていいすんなりとは行かず、

「行ってもいいか」とまず許可がいる。彼が「いいよ」といったとしても、子供をどうするかで、あれこれ悩んだり、だれに頼めるか、当たったりしたうえで、結局つれてゆくことになる。

子供の衣食眠、全部考えて、それに必要な荷物とおもちゃをもって家の留守中のことも手を打って、やっと出かけられるのだ。

それでも私は行くと楽しい、勉強ができるから、子供づれでどうしても行きたい会をしぼって参加してきた。

合宿だけでなく、他の教育懇談会や研究会だって、たいてい子供づれになる。そうすると話の半分くらいしか参加できず、子供が眠くなれば、打切って帰らねばならない。何をするにも第一に子供のことを考えて、わが身の行動をきめる「しんどさ」というのは、男にわかるだろうか。

家事の重み

毎日、五時か五時半、保育所から子供をひきとると、帰りに買物にまわる。子供三人が車中でじっと待っていてくれればいいが、勝手にドアをあけて出てくるし、店に入ると買物に時間がとられるし、いつも気が気でなく、あわて買いになってしまう。

家族五人だと、毎日何かしら入用なものが出てくるのだ。たまに買物をせず、まっすぐ家に帰るとても得をしたような身軽な気持になる。

買物をすませて帰宅すると、五時半か六時。赤ちゃんをおろし、車中の荷物を玄関にドサリと山積みすると、洗濯ものをとりこみ、郵便受をのぞいて、立ったまま目を通し、いそいで着替え、エプロンをつけると、荷物の整理。

これは洗濯機、これは流し、これは冷蔵庫などとふりわけし、すぐ食事の準備。その間、赤ちゃんの世話や授乳。二人の子供の相手や、無公害牛乳共同購入の世話人としての仕事。それからお風呂を準備し、洗濯機をまわす。

ここで何らかのことで手順がくるうと、子供はお腹がすいたとわめく。赤ちゃんは泣く。まだ洗濯ものはとりこんでいない。電話が鳴る。鍋はふっとうする。てんやわんやになるから、頭と体をフル回転させて、ことにあたらねばならない。

やっと夕食が七時か七時半。はじめてすわるわけだが、これも立ったりすわったり。

食べ終ってほっとするが、これでじっとしていると疲れが出て尻があがらなくなるから、間をおかず立ちあがり、食器や台所のあとかたづけをする。一応洗ったところで部屋の掃除。こちらが食事の支度をしているあいだに、狭い部屋を子供二人で思う存分ちらかしているから、動きがとれない。

ふとんを敷いて、三人をお風呂に入れる。大人が一人でもいれば赤ちゃんの入浴は楽だが、全部を一人でやると上ればヘトヘト。

つぎに寝るまえに絵本をよめとせがまれ、赤ちゃんに何かのませながら、二人に本をよむという芸当をやり、二人が九時か九時半、前後して赤ん坊が寝つくと、まずほっとする。

ここですわりこみたいのだが、がまんして立ちあがり、入浴のあと始末、洗濯機の残りをまわし、（毎日三、四杯はある）洗った食器をふいて戸棚にしまいこみ、とりこんだまま山になった洗濯ものの前にすわってたたむ。たたんで、ひきだしにそれぞれわけてしまい、ちょっと破れたところやボタンをつけたりすれば、それだけでも手早くやって三十分はかかる。

まだある。明日の準備。

保育園にゆく二人分の持物。赤ちゃんのおむつや着がえ、私のと四人分の準備はばかにならない。最後に二人の「おたより帳」と赤ちゃんの連絡帳をかく。これでたいてい十一時。もう疲れてうごけない。

そのまま寝て、朝早くおきたりその後、つづけて一時ごろまで、やっと自分の仕事（ガリ切り、授業の勉強の準備）をする。カバンに子供のテストや、作文をもって帰っても、見ないままもってゆく日も多い。自分の時間をつくるのは夜寝る時間をけずるしかないのだ。赤ちゃんがいると、夜中も起きるから、こんな具合では体もこわす。

彼が帰ってくるのは洗濯ものをたたんでいるところ。洗濯ものを干すのは彼の役目。夜しんどいと朝干している。もともと洗濯は彼の領分だ。彼の分担だからとおそく帰ろうが何しようが、やらないでおいたら、ひどい目にあうのは私だ。疲れていようがいまいが、毎日確実に洗濯を干さなければ、どんなに困るかが、彼にはわかっていながら、都合の悪い時は明日やるといって放ってしまう。

家事とは何か

夫も家事を分担しようといっても、男は手伝う、女に協力するという意識であり、家事、育児を自分の仕事として責任をもつという感覚がないから、都合が悪ければ逃げ、甘え、または「やらせられる」という不満をもつ。

彼にも言い分はある。「一歩外へ出れば仕事仕事でめいっぱい精力を使い果し、帰ってきたらひまさえあれば家事、家事と、もうおれはいやになった。もっと人間らしい生活がしたい」と。

たしかに彼は彼で楽だとは私は思っていない。しかし家に帰れば風呂にも入れ、ごはんもすぐ食べられて、ともかくも息をぬける男性に比べて、帰った時から新たに闘志をわかして、もう一仕事しなければならないのが女性の立場。

女は自分で行為しなければ風呂ひとつ入れない。もっとも私は男性と同じにあげ膳、すえ膳になりたくてぐちをこぼしているのではない。家政婦を雇おうという彼に賛成しないでいるのは、お金がないということもあるが、自分で生きてゆく営みを自分の手でやるという誇りみたいなものを、私が生きる姿勢において手放したくないという感覚があるからである。

家事とは何か。育児とは何か。私の考えでは家事は生きることそのもの、生きるに必要な衣、食、住をととのえる、営みのことなのだ。育児もまた、私ども人間が生き続けるための社会的行為であって、産むのは女であっても、男女共通の共同の仕事である。そして子育てをしてみるとよくわかるが、成長とは他者（母親）に生殺与奪の権利を百パーセント握られ、やってもらう以外に、食べることす

らできない赤ちゃんが、一つ、一つものを握るようになり、自分で排泄できるようになりして、自分で生きる力を獲得していく――つまり自立していく過程のことであり、それは真に感動的だ。

自立とは何か

男たちは結婚すると、自分の衣食住は人にととのえてもらい、金を稼いでくることが自分の唯一の仕事みたいに、逆成長するのはどういうことだろうか。

そのため、男の世話をやかない女はけしからん女だ、ということになってくるが、ほんとうは男の歴史性のなかで、生きる力として自立性を奪われたのは男性であり、自立できないのは男の方ではないかと思えてならない。

彼は夫婦げんかをすると必ず、「お前がやめないのなら、おれが仕事をやめて、家で家事をやる。片方が外で働いて、片方が家のことをやるというのは差別じゃなくて、平等な分担だ。養われるのはいやだなどと、被害妄想もいいかげんにしろ」というのだが、家政婦を雇って、夫は安心してまったく家事のことをしなくなり、私はいささか楽になっても、家のことに全責任をもたされるのもいやなら、彼が家にいて、私が働くという逆の立場も、生き方としていやなのである。もっとも彼に一生そんなことができるくらいなら、悩みもすまい。

両性ともに、社会的に労働し、家事・育児もともに、自分のことは自分でやる。男もそういうように生活感覚をとりもどすことによって、男女平等だけでなく、教育問題・保育園問題なども変ってくるのではないだろうか。

私たちはお互いの生き方は認めあっていたし、安保世代として通じあう考え方をもち、他のことでけんかをすることはなかった。しかし家事育児の要求をすると、きまってけんかになり、ふだん冷静と自称している彼が、きまって激昂し、時には「理屈ではない」とぶんなぐられるのだった。

でもそのとき、正反対のことをいっても日が過ぎると、やってくれるようになることが多く、私は夫婦げんかの有効性を信じるから折をみてはいい続ける。そうやってずいぶん彼も変ってきた。とくに三人目が生まれてからは、日曜日も私が六時から起きているのに十一時まで寝ているようなこともなくなったし、食卓に箸がないと「はし」とまえのように座ったままどならず、自分でとりにくるようになった。

この社会がひどく男向きにできているなかで、夫個人だけに矛盾を解決させようというのも、もう限度ではないかという気が私はするのだ。夫は会社の中で共働きはうちだけで、みんなから奥さんをやめさせろ、といわれるという。またすぐ近所に同じ会社で年も少し若いくらいの人がいて、同じように遅く帰ってくるが、夜十一時頃外でセンタクものを干している夫をみて、「大変だなあ」という。その人と比べれば、確かに彼も大変で、ゆっくり休息できないのはかわいそうとも思う。

彼の世界は、まだ子供や家のため仕事を二の次にする、ということは認められていない世界だ。だから子供が病気になると、ふだん私がどうしても仕事を休むようになるが、これ以上休めなくなると、彼に「今日はあなた休んでよ」という。たまにO・Kがでるが、会社に電話するのに絶対子供が病気で、とはいわない。自分が腹痛とか風邪熱とかにしてしまうのである。

母親がいるのに、男が子供のために休むなんて通用しないというのだ。だから、共働きで私がつらいように、彼もまた内助の功に支えられて、全エネルギーを猛烈社員よろしく企業に出しつくして成り立っている世の中では、大変につらいにはちがいない。

そして、私が仕事が大事なように、彼の仕事が大事なのも分かる。しかし、このままでは、私は仕事をいつやめねばならないかという不安に日々直面したままだし、たとえ偶然に私も子供も健康に恵まれて仕事を続けたとしても、女であるという名のもとに自分の内実を犠牲にし、形だけ出勤するのは屈辱的である。

私は自分の大変さからだけ、家事・育児の平等要求を出しているのではない。男も人間として家事・育児をやるのが当り前ではないか、今のように全持時間を外で労働し、家に帰ったら食べて眠るだけの生活なんて人間らしいとはいえない。家事・育児をやらせろ、といい出す男がふえ、全生活を背景に労働を位置づけ考えられるようになれば、世の中ぐっと変ると思うからこそ、夫に「好きで働いているんではないか。条件を無視して意地をはり、我がまますぎる」といわれても仕事はやめないで、逆に男性に家事分担を要求しつづけているのだが。

たとえ男性にしんどくても、それが両性のためだと信じて。しかし、道が開けるかどうか、全く分からない。現在の私は悩みっぱなしである。

（おくやまときこ・小学校教員・35歳）

わたしのギリシア神話

―エロスへの回帰―

富山妙子

富山妙子さんの手でよみがえった『わたしのギリシア神話』は，じつに豊かで，しかも明晰なギリシア神話である。そこにはこの尨大な神話を，「父系から母系へ移行する時代の葛藤のドラマ」としてとらえる新しい女の眼が，一本の赤い糸のようにつらぬいている。ギリシア神話とはこのように首尾一貫した，豊かな葛藤にみちた世界だったのか―。わたしはよみ終えて，眼を見張る思いがしないわけにはいかなかった。

好色で暴虐な家父長ゼウスの支配をはねのけながら，全身で愛し，憎み，反逆し，世界を織りなしていく神々や若い人間たちの姿からは，この現代の日本の混沌を生きるわたしたち自身の姿が浮かびあがってくる。

高良留美子（詩人）

・二色版リトグラフ24枚入り￥850

東京都新宿区三栄町22　童心社

女の解放　男の解放

どこに解決の道はあるか

奥山さんのレポートを読み終えた時、誰もが深い嘆息をついた。これは自立を願い、働いてきた女たちが通ってきた共通の苦難の道である。つい最近も三人の子供を抱えて、ある組織で働いていたSさんはついに過労で倒れた。

二人の子を抱えて働いていた編集者のKさんは、姑に同居してもらうことで、解決したが、しかしこんどは嫁姑という、なおもやっかいな問題を抱えこんでしまった。

二人の子供をやっと育てあげた教師のYさんは、夫の転勤でやむなく仕事をやめてしまった。Yさんは仕事か離婚かと悩みつづけ、結局夫に従うより仕方がなかった。

家庭をもった女が働くということは、家事・育児の過労、夫の転勤など、いつやめなければならないか、ひどく不安定なものなのだ。

自分のパンは自分で稼ぎ、自立した生き方をしよう、他人に自分の人生を左右されたくないと決意した女たちも、結婚してそれを貫くことはむつかしい。子供を育てるあいだ、一度家庭にもどれば、職場への復帰はまず不可能だろう。

女の悩みの源泉は家事・育児を女のものと決めつけている役割分担の固定した社会であり転任の時女は男に従うとしている、その男社会の秩序である。女が自立した人間として生きようとした時、ぶつかるこの問題に、男はどれほどの痛みや、理解を示しただろうか。

かりに痛みを感じて、「妻の仕事をやめさすのがしのびないので、転勤に応じない」という男がいたら、世の人たちはなんというだろうか。

「いくじなし。女房の尻に敷かれて。男のくせに。だらしない」というような非難なのだ。

子供の病気のため、男が勤務先を休めばどういわれるか。

「奥さんは何をしているのか。そんな男に責任ある仕事をまかされぬ。男としてフガイない」ということになり、男のコケンにかかわるのだ。いやコケンだけではない。それっぽちのことをなぜ言えないのかというと――同僚からの「村八分」ひいては、出世のさしさわりへと、底は根深い。

どこに解決の道を求めるか

女に対して理解力があったとしても、男秩序の世界で、自分の考えを行使するのは、たいへんな覚悟がいるところに問題がある。

男が家事をしても、男のプライドが傷つくわけではないが、男は抵抗を感ずる。家事は「くだらないもの」、「家事は女の仕事」と決めているので、家事をする男は「ダメな男」の象徴として、男はそれをさけてきたのだが、そこに女に「くだらぬ家事労働」をさせる性的差別のカースト制がある。

だから託児所の数だけふやし、女も働けるようにしようというのは、ソビエト型社会主義をふくめて、家事・育児を女のものと役割分担を固定化させた発想である。

私たちのめざす女性解放とは、役割固定化を根底から問い直し、その中で未来社会の像を追求しようとするものである。次に掲げるレポートは男も自己変革することによって、状況を変えられる例を物語っている。

変えるために変わろう

―わが自己変革の記―

増野　潔

いつの頃からか、「お前はT大に入るのだ」と、親やまわりから進路を選択され、何となく「その先に何かがある」と思いこんで走ってきてしまった自分。入ってから辺りを見回してみたら〝成績が良いことと、人間的魅力とは全く別のもの〟という当り前のことに気がつき、官僚の卵のような学生達の中で、唯一、人間的魅力を残していたのが、学生運動家達。自分もやがて、デモや集会の尻っぺたにくっついて忙しい日々が続いたが、この人達の中にも「労働者大衆を指導せねばならぬ」といったエリート意識が見えてくると鼻につき、「やっぱり、労働者自身の中に身をおかなければ」とばかり、セツルメントや中小企業の争議にかかわるようになったのが、ちょうど60年安保頃。

「卒業して企業に就職さえしてくれれば他の干渉はしない」と頼む親に、以前結核療養中、ずいぶん苦労をかけた弱味と感じて、さる商社に就職はしたものの、営利と保身と出世欲にうち固められた職場では、労組活動もままならず、ダークスーツとネクタイの生活に二年で見切りをつけた。

政党運動の中で

そして、南部工業地帯の一角、丸い箸を食卓に置くとコロコロ転がり出す程傾斜した安アパートに居を移して、ペアの彼女ともS党の専従活動を開始。子供もいらぬ、ご馳走もいらぬ、ドレスもいらぬ、と、プチブルのお嬢さんに育った彼女としては、かなり思いつめたに違いない暮しの24時間。数年間は夢の間に過ぎた。

しかし、子供を持った仲間達との間に、なんとなく感じはじめた

沾動感覚、生活感覚のズレ。「特殊な人間だけがやる革命」なんてナンセンス、平均的な生活と、革命運動を両立できるようにならなくっちゃ、と結婚以来5年間着用のレインコートを脱ぎ捨てて、間もなく彼女のツワリが始まった。

それまでは炊事、洗濯一応平等に分担してきたつもりだったが、ツワリばかりは共有できぬと逃げ腰の僕。「冷たい」と、男の身勝手を糾弾する彼女。わが内なる性差別に気付き始めた痛みを、イヤナニ自分は革命のために献身してるんだから、と、今から思えば狡い言訳をしているうちに、彼女は実家で出産。

帝王切開後の母体が回復すると早速また、ビラマキに、集会にと動き始めた彼女の背中でそれでもわが子はだんだんと成長したが、一向に成長しないのが革新運動の、とりわけ不肖の甚六であるS党。折から70年安保を目前にして〝佐藤訪米阻止〟と大会決議までしておきながら、そして僕らに六郷土手の集会場確保と推定一万人の動員準備をさせておきながら前日になって、党の機関でもない三役会議で中止を決定。この時ばかりは冷静を自負するぼくも血が逆流、銀髪自慢の書記長の、キンタマけりつぶしてやろうかと、本気で思った程。かくて非合法化された11・17集会の、指揮者の容疑でブチ込まれた17日間の豚箱の中でわがS党生活10年の総括を終了。間もなく始まったS党の〝反戦派パージ〟に最後の抵抗を試み、党本部の建物の一室に赤旗おっ立てて占拠闘争数カ月、ついに力尽きて仲間達と解散、35年の半生に一つのピリオドを打った。

男たちが忘れてきたもの

さてそれからはナッパ服に、その日その日トラック乗り換える日雇い運転手。それも2年とは続かず小学校の、アレそんな職場もあったかと教師も驚く警備員稼業。彼女の方は保育園の保母、これも3年と続かず頸肩腕症候群という職業病。さても子供を預かってくれて便利な所よ、女の自立に不可欠よ、と信じてきた保育園が、保育労働者にとって地獄なら子供にとっても地獄のはず。女性解放と保育園の関係を、彼女は根底から問い直し始めた。一方僕の方も、職業に貴賤なしなど絵そらごと、踏みつけられて初めて知る底辺の痛み、それに家事・育児、この世の片隅においやられてきた領域に足を突っこんで思うことは、さても男達は、この生活領域の原型、生命活動の基本的世界を遠くに置き忘れ、蔑にしてきたものかな、その代りに価値あるものと思いこまされてきたのは物質生産の世界。ヘドロ公害ウズ高く積み上げて、さて誰がより高くまで昇れるかと、競り合うエコノミックアニマルの、コンピューターは扱えても、てめえの食うものはインスタントラーメンしか作れぬ悲しさ。その男達の後を追って、働きまくるのが女の自立か、子供は保育園に、それも長時間、預けっ放しでてめえの専門職を研ぎすますのが女の解放か。さてもまた、この生活領域放っといたまま、権力変らねば何も変らぬと、まなじり決しての職業革命家、気に入らぬ奴片端から鉄パイプで叩いたところで、人間関係変えねば権力倒したところで何も変らぬ道理、これはロシヤを見れば一目瞭然。されば今までの運動根本から、洗い直してかからねばと、彼女同様思いつめだしたのが約2年前……。

共同保育運動の中で

以上のような歩みを経て、辿りついた今の考え方を要約すると…

①家事・育事という基本的な生活領域は、男も女も、自然な生命活動の一部として関われるように、現在の生活のあり方を変革していくべきだ。育児は女の仕事だ、とか、専門の保母に任せればよい、という姿勢では、押しつけられた側にとっては苦痛になるし、押しつけた側も、育児から人間的優しさ、といったものを学ぶ機会を失うことになる。もちろん、子供にとっても不幸なことだ。

とりわけ、今の状況では男が変らねばならない。僕達はこれまで、生産力至上主義→分業→専門職細分化という論理によって、人間性の多くを失ってきた。男が失った分を、女が得たのではなく、生命生産の領域は、物質生産より劣るものとして、蔑にされてきたのである。今必要なことは、この位置を逆転すること。モーレツ社員であることを男の誇りとする価値観を拒絶し、必要な育児時間を男も女も企業からモギ取る運動を起すことである。

②企業からモギ取った育児時間をマイホーム主義的にしか使えないのでは、問題は何ら解決しない。育児は家庭で、という保守的、支配的イデオロギーは、子捨て、子殺し、育児ノイローゼの親達、教育ママを生みつづけてきた。一方女性を家庭のクビキから解放しようとした集団保育論は、百名を越す大規模保育園の中で進行する効率的管理保育と、続発する保母の職業病に対しては口を閉したままである。「保育の社会化」という言葉が資本主義社会の包摂力に対する警戒心なしに語られる時、社会化は合理化と同義語になる。

一方における育児の私事化と、他方における育児の合理化という二つの矛盾と切り結ぶ道をいま僕達は、共同保育という運動の中で模索している。

共同保育は、男も女も、子持ちも子無しも共に自分の生活の一部として育児に関わり、預ける者、預かる者の分断した関係を一歩でも越えようとする試みであり、また、行政権力と専門家の管理下におかれてしまった生活領域を、僕達自身の手に取り戻し、家庭の体制補完的機能を壊していこうとする試みでもある。

③共同保育運動はしかし、ユートピア建設運動ではない。経済的な面でも人間関係の面でも、資本主義的要素は、狭い保育所の中に雨アラレと吹きこんでくる。

体制との休みない闘いなしに、共同保育運動は一歩たりとも前に出ることはできない。

ただ、家庭の中だけで、一対一の男女の間だけでやりとりしていた問題が、皆の問題になることによって、道が開けてくることも多い。赤ん坊を背負ってスーパーのレジに並ぶことは、慣れない男には抵抗感があるが、仲間の男もやっていれば心強い。てめえの家のふき掃除は苦手な僕も、共同保育所で、きれい好きな女性と組んで働く時には、ケナゲにも、トイレの中まで雑巾をかける。

それにしても僕達は、切り拓くべき長い道のりの、ほんの入口に立ったにすぎないように思う。子育ての領域だけでなく、教育、医療、老人、障害者の問題を、行政サイドから自分達自身の手にとり戻していかねばならないし、農業生産と消費者の分断した関係をも変えていく方向を見つけなければならない。

この気の遠くなるような道のりを、一体、革命なしに歩ききれるのか？　と問う友人もいる。無論

革命なしに全体的な関係を変えることはできない。しかしまた、革命によって全てを変えうるとも思わない。政治革命は短期決戦だろうが、社会革命には長い時間が必要だ。僕達は、いわば機動戦と陣地戦の両面において闘いぬく戦略を持たねばならぬ。

僕が10年を過したS党の運動＝総じて既成革新の運動には、そのいずれの戦略も欠けていたと思う。議会戦略は、大衆の手から、少数の専門家の手に政治を疎外していくものでしかないことは、今日ますます明らかになりつつある。

④女の解放は、家事、育児を保育所、食堂に委ねて、男と肩を並べることではない。女の自然性を男社会に突きつけ、物質生産の方を向いた男を、生命生産の方に向かせることが、その闘いの第一歩になるべきだ。出産と授乳以外で男に出来ないことはない。男にオムツ換えをためらわせているのは、彼が育てられてきた歴史性と、彼の住んでいる社会だ。彼を変えるのに一対一の関係で無理なら、複数の共同の関係で試みよう。それが闘いである限り、心に傷をつけ合うこともあろう。自分も無傷ではいられまい。だが本当に世界を変えようとするなら、自分がまず、変わらねばならない筈だ。

変えるために、変わろう！　女が解放されなければ、男も未だ解放されない。

（ますのきよし・月刊紙『交流』発行責任者・39歳）

家庭内で結ばれる女と男との関係は，
社会の中での，その人間のありよう
そのものの縮図ではないだろうか…

日常生活の中で問われる思想性

家事・育児をどうするか――日常生活から発するこの問いは、結局は女も男も思想性の問題に帰することになる。

いったい思想性とはどういうことか――むつかしい論文を書けることか。人前でうまく喋れることか。政治活動をして飛び回ることか。

ある反体制運動の活動家のなかで「第二戦線論」という「新説」があるそうだ。これは「カアちゃんに嫁がせて、男は革命に専念」というのだそうだが、相変らず戦前のハウス・キーパー的発想を「コトバのアヤ」ですりかえているにすぎない。いったい女を踏み台にして行う革命とは何か。

全共闘運動の中で、「タテマエとホンネ」の一致が問われたが、そのおなじ問いは男社会の男の特権に安住している男たちへ、女の側から当然問われることになるだろう。

思想性とは日常の生活のなかで検証される。そして自己のあり方を問われ、自己変革をつきつけられる。真の思想性をもつことはまことにシンドイ話である。

女と男の存在のありようそのものが、家庭のなかでの男女関係となる。これまでの家庭内での男女のあり方は、女は男の内助者として存在し、まったく対等な存在というのはまれであった。

いったい男女はどのような状態になれば、対等な人格として向かいあえるか――それは近代文学のなかでの課題となり得ても、現実生活のなかでそれを問いつめた例はあまりにも少ない。

次に掲げるレポートは、女と男とがお互いの生き方そのものを追求し、変革し合い、そのなかで形づくった女と男とのあり方なのだ。ここまで到達するには、小さな問題もおろそかにしないで追求してゆくという、長い年月の努力の積み重ねを要したことだろう。私たちはここに新しい男女の関係のはじまりを見る思いがする。

時代は、やはり少しずつ前進しているのだ。

二人の関係
――新の共同性を求めて――

三和昭子

共同生活を始めて今日に到るまでの総括として書いてみます。

始めは彼も学生だったので、収入も少ないし、私が仕事を続けることは当然でした。私は何もかも自分でやる自信もなかったせいもあって、夕食づくりは私、後片付けは彼と分担を決めていましたが、それ以来、彼は特別の事情がない限りその分担を怠ったことは一度もありません。

周囲の人は始めは〝新婚だから〟ということで、そのことを大目にみていたようです。しかし二年目にしのが生まれて産休が明けると、保育に出し、私の仕事時間の都合で送迎は彼が引受け、一時間の通園を毎日やっていたのに同情して、私が仕事を続けることへの非難がはじまりました。

男が保育園の荷物をいっぱいぶらさげていく姿がみじめだ、男らしさのイメージから程遠く〝こんなことばかりさせてると男はダメになるよ〟というのです。彼は〝僕は別に苦痛じゃないよ〟というので現状維持のまますぎました。二番目の遼が生まれ、産休が明けても保育所が見つからず、三月（四八年）で仕事をやめたのですが、子どもが生まれることでなぜ女が仕事をやめなければならないのかと、悔やしい思いで数人の仲間（「女・子ども」の会で学習していた）と十月から「ぽんぽこ」を開始し、遼を連れて専従保母として働くことになったわけです。

しのの送迎は相変らず彼。私は共同保育の中身を作りあげるという面倒な役割上、洗濯も、夕食作りも彼に任せざるをえない場合が多く出てきました。一旦、選んでやりかけた事を途中で手を抜く器用さもなく、全生活でのめりこん

でいく私をどう思ってか、週に三回も四回も集会があると、私の健康を気づかう形で、彼はブレーキをかけてきました。

そうなると、私はますます馬車馬のように彼の側を走りぬけ、ふと気がつくと、私と彼との共同性の中身が見えなくなっていました。子どもの世話を共有し、家事を共有し、生活を維持させることが二人のすべてに思えたのです。

「家庭」という安逸のなかで私たちは人間関係としての共同性を見失ったと知った時の悲しさ…／私は別居を迫り、三歳のしのを置いて一歳の遼と家を借りました。しのは「お父さんとしののお部屋」に引越し、毎日「今日はスパゲティだったよ、こんど遊びにきてね」とか電話をかけてきて時々は私のアパートに遊びにきました。そんなことをしているうちに、しのは高熱、ひきつけを契機に〝小児てんかん〟と診断されたのです。

私と彼との相剋のなかでしのはやり場のない不安を感じたに違いないと思うと、私と彼との共同性に対する一つの疑問符＜別居の形＞が子どもにとっては、全精神生活の破滅に近いこととしてあることを知り、問題を二人の世界のなかで純粋培養する形では、片手落ちだと考えはじめました。

「家庭は諸悪の根源」と強く感じてそれを崩すなかで、真の共同性をと考えていた私自身に、私は一つの修正を加えずにおれなかったのです。現にある私と彼、私の子どもたち、子ども同志という関係の中身の追求が、実生活の中でもう一つ不足していたのではなかったか。自分一人の観念の中で答を出していった自分自身を痛烈に批判せざるをえませんでした。

しのの病気が分かった後、私はしのに対する責任を何とかして負わなければ、「共同保育」の現場を担う資格はないと、結局、しのは私の家に住むようになり、彼は私が三人目をお腹に抱えていたこともあって、毎朝早く私の家にしのと遼を迎えにきて、二つの保育園に送り届け、迎えて私の家に連れ戻り、自分は帰ってまた次の朝迎えにくるという生活が半年程続きました。そんな中で、私は再度彼に惚れたのです。この人と共同生活をまた始めてみようと決めました。

いまは子ども三人と計五人で一つの家に住んでいます。それ以来私たちにとって、家事や育児を分担するという取決めは一切要らなくなりました。帰ってきて、互いの顔を見て疲れ具合が分かれば調整できるからです。

集会がある夜は彼が三人みるし、彼が疲れているか、子どもの病気の時は私が元気な一人を連れて集会に出ます。彼は始めから、会社に対して、保育園の送迎があるからということで、諒解をとっているし、子どもが病気になれば、互いの仕事の緊急度に照らして、片方が休む形をとっています。

始めは嘲笑半分に「よくやるなあ」と同僚に言われていたようですが、今ではもうそれが当り前になって、子どもの迎えに車をまわしてくれる同僚もでてきました。私はそれで当り前だと思う——、いや、まだ足りない、育児時間を彼も獲得してゆくべきでしょう。

しのは抗てんかん剤を毎日服薬しながらも、今ではリーダーシップをとってゆけるほど、集団生活を楽しめるようになりました。私たちにとって子どもたちはカスガイでなく、私たちにつきつけられた、共同性の中身のバロメーターのようなものだと話しています。

生活のなかで感じたことは、どんな些細なことでも言葉化して相手につきつけていく、一人の世界で解答を出さない、これが今の私たちの共同性の唯一の原則といえるかもしれません。

彼へのインタビュー

聞き手・私

「あなたのことをよく人は特別だよという風にいうけどそのことどう思う？」

「僕は別に特別なことしてるつもりはない」

「だけど、毎日山のような洗濯したりイヤじゃないの？」

「イヤったってやらなきゃならない事だし、独身の時だったらどうせやってたことだから。ただ子どもが増えたということで、子どもは一人で洗濯できないしメシも炊けないからその分面倒見るだけで当り前のことだろう」

「そうじゃない男が常識的な線じゃない？」

「メシ食ってクソして寝るのと同じことで、それを家事・育児という言葉で区切って女に押しつけてる男は、僕からみれば逆に可哀想。自分のクソの始末もできないんじゃみっともないよ。だけど逆に、女が育児・家事からの解放＝女の解放ということを言うんだったら、それは解放への第一歩であるには違いないけれどすべてじゃない。大事なところは、そういう常識的な通念をふりまわす男に女がその通念を破れと迫るところにあると思う」

「それは、家事・育児を男もすれば足りるということだけじゃない広がりをもった問題ね」

「要するに、男だってメシ食うし、パンツだってはき捨てする程豊かじゃないから洗濯せざるをえない。当り前の事をなぜやらないのかということでしょ。僕を特別視する世間の方がおかしいじゃないか。会社でもステータスのために当り前のことを主張することを押えていて何らかの自己への負い目(＝傷)を感じている人がいる。もちろん、自己への忠誠を果さなかった見返りとしての傷に到る前に、通念の中に自己解消してしまう者は、自己への裏切りにも気づかないだけだろうけど。東神大闘争の中でさえ、僕は自分のホンネを闘争という通念の中で切りすてて、優れた理論家の言葉尻に乗っていくという事によって、通念に埋没していた自分を発見した。その傷はいつも僕の目の前にあるんだなあ。

もちろん闘争の中で、問題をあくまで問題としていくいわば抵抗の姿勢を作らないと、今までの視点では生きてゆけないことを知った。従来のものをそのままの形でスンナリ認めるわけにいかなくなった。大状況の問題としてだけでなく、自分が今まで当り前と思って暮してきた事柄——特に家の中でのこと——を総点検せざるをえなかった。闘争の中で得た視点をあくまで貫徹するということは、自分の生活のすみずみもその領域外ではなくなったということだ」

結局、インタビューに始まって延々6時間の討論をするハメになりました。それにしても、一組の惚れ合った男女間でさえ、共同性の中身を獲得していくのに日々の闘争は果てがないのですから、まして生活を共有しない者同志が各々の生活の中から抽出されたある部分で共同性を追求してゆくのは至難のことで、一切の幻想など成り立ちえないことなのでしょう。でも、だからこそありのままから出発するしかない……一つの気楽さを感じているこの頃です。

(みわあきこ・乳児室「ぽんぽこ」保母・32歳)

＜インタビュー＞

高度経済成長と被差別部落の女たち

◀小林初枝さんに聞く

埼玉県の西端、群馬県と境を接するところ、児玉郡児玉町のはずれに〝田町〟と呼ばれる被差別部落が存在する。そこは国鉄八高線の線路で町の続きからは区切られ、九郷川と後ろの狩野山に囲い込まれた形の二百七十戸程の集落であった。今回は、ここに住む『おんな三代』（朝日新聞社刊）の著者、小林初枝さんをたずねてみた。

二重の差別を受けて

――小林さんが被差別部落出身の女性としてめざめられるようになったのはいつからですか？

小林　私が解放運動に加わるようになったのは、高校の事務職員をしている時にそこの教頭が起した差別事件がきっかけで、昭和三十三年の「部落解放第二回全国青年集会」に参加してからです。被差別部落の歴史を知り、「我々がエタである事を誇り得る時がきたのだ。

我々は、かならず卑屈なる言葉と怯だなる行為によって、祖先を辱かしめ人間を冒瀆してはならぬ。そうして人の世の冷たさが、何んなに冷たいか、人間をいたわる事がなんであるかをよく知っている我々は、心から人生の熱と光を願求礼讃するものである。

水平社は、かくして生れた。

人の世に熱あれ、人間に光あれ。」

という水平社宣言を読んだ時の感動を今でも忘れることができません。それから、自分の境遇を卑下せずに差別をなくしてゆく方向で生きてゆこうと決意したのです。

よその部落では、搾取する者は外にいるという場合が多いのですが、ここの部落の特徴は、それ自体で一つの完結した生活圏をなしており、昔から部落内に地主が何人かいて階級的な差別があったことです。地主は金貸を兼ねていましたから、「二重取りは楽だけど、三重取りは骨が折れる」などと豪語しながら、小作人たちが字が読めないことをいいことに証文を二通作ったりして、あくどいやり方で資産をふやしていきました。

私の家は女世帯で小作、それに血縁関係もほとんどなく、部落の中の最底辺として附き合いなどからも疎外されていました。相互扶助というのは血縁関係が中心ですからね。

差別の本質は変らない

――現在の差別はどういう形であらわれていますか？

小林　部落解放運動の成果で、昔のように、日常生活の中で露骨な差別はでてこなくなりましたが、差別の本質は、あまり変らないと思いますね。ここ田町は、埼玉県下では最大の被差別部落といわれていますから、田町というとすぐに被差別部落というのが人々の頭の中にあり、結婚というとでてきます。例えば、「田町は〝破戒〟に関係ある地域」という風な表現で縁談がこわされています。しかし、このところ、ある程度通婚（部落と部落外の人との結婚）が増えていることも確かです。私の母の時代では、田町全体で三人位でしたが、今では、二十軒以上数えることができます。それも、見合という形での通婚はありません。

〝若い者同士が仲良くなっちゃったんでしょうがない〟というあまり好ましくない形ですが。その場合も、部落外から部落へきた者は比較的大切にされるので、割合うまくゆくのだけど、部落の人が部落外へ行った場合は、相手が承知して結婚しても、親戚はじめ周囲がうるさくて悲劇が起るようですね。

それと就職差別です。私が親しくしている人で、国鉄に勤めていた人がいるのですが、二年程で辞めてしまったんです。安定した仕事だと喜んでいったのですが、毎日毎日、便所掃除ばかりやらせられるので「なぜ、皆のヤがる仕事ばかりさせるのか」って聞くと、「その訳は言えない」って言うんですって。こうしたいやがらせがキリなく続くので、せっかくみつけた仕事も長続きしない結果になる。ところが、その人だけでなく、部落にはこういう人が多い状態なんです。

――高度経済成長政策下の開発ブームが日本列島を隅々まで侵食しつくしていますが、被差別部落には、それがどういう形であらわれていますか？

小林　この部落のすぐそばにも関越自動車道や国道二五四ができていますが、部落を分断して道路が走るんです。この辺どこをみても、バイパスというのは過疎地域を通るんですね。被差別部落というのはもともと地理的条件の悪い所に位置しているので、この過疎地域にあたるんです。国の政策でツケがこちらに回ってきたという感じです。これは部落問題だと、解放同盟の役員が反対したのですが、部落の保守派の誘致運動の方に押された形になってしまってます。

開発ブームがこの辺に初めて現われたのは昭和三十四年の野村証券のゴルフ場造設計画です。農地解放で二十四年に、一反五千円で払い下げられた土地を六万五千円で買い上げたので、当時は皆喜んでました。六十数軒のうち、最後まで頑張ったのは、私の家を入れて二軒だけです。部落の顔役が動いて、「ゴルフ場ができれば、部落の人を使うから働き口ができる……」というふれこみで買収されてしまいました。その頃は、部落の人に仕事がなかったからとびつく理由があったんですね。

高度経済成長と部落の産業

――さっき、部落内を案内していただいた時に、瓦製造業の家が多かったようですが、この部落の産業構造を説明して下さい。

小林　このあたりは、一戸当り平均反別五、六反の養蚕地帯でした。児玉という地名も蚕玉から転化し

ていると言われるくらいです。もちろん、それくらいの耕地面積では農業一本で食べてゆけませんから、男は土方、しょい出し（かつぎやのこと）、女は草履作り、機織りをしていました。

昭和三十年後半の建築ブームになってから瓦屋が急増しました。戦前は十軒程度だったのが、四十年代には六十五軒になっている。特に、ここ五年位の瓦屋が多いようです。児玉瓦は、三河の三州瓦と並んで、日本の屋根瓦の大半を生産しているんです。

瓦屋の急増と共に、煙害で桑がやられ、養蚕が駄目になり、部落の人々は瓦屋の日雇い仕事をするようになったのです。それまでは、土方仕事をしていても「チョーリン坊のくせに……」と土方仲間から差別されることが多く、長つづきしませんでしたから、部落の人々は瓦屋で働けることを喜んでいます。日雇いの形ですが、男は月十万円位、女は五、六万円位で、皆夫婦で働いています。最低限の生活はなんとか保証されますからね。

――その場合、正式に社員として採用せよとか、健康保険、失業保険などに加入するというような要求運動は組織されませんか？

小林　瓦屋の規模というのは十五～三十人程度で、そこで働いている人はほとんどが血縁関係で集められています。ですから、権利要求のために解放同盟の入る余地はないという状態です。

駆逐された女仕事

――さっき養蚕の話がでましたが、養蚕というものは、元来女が中心になって働き、女個有の力が発揮される産業で、そういう意味で女仕事と言ってよいと思います。ですから養蚕地帯というのは、一般的に女の地位が高いと言われます。ところが、この地域でも、それが瓦製造業にとって代ったとすると、当然女の地位にも変化が起ったと思いますが……。

小林　部落の人々は貧しいなりに、昔から比較的男女平等でした。それは一つには、男は働きたくとも外に仕事がなかったので、一家の生計も女の働きに頼っていたということによるのだと思います。女衆の仕事は戦前は主に草履作り、戦後は伊勢崎銘仙の賃機をやっていましたが、男衆は機織りのために管まき（糸をまくこと）など裏方的仕事をするんです。機織りは時間に追われる仕事で、朝早くから夜なべ仕事までする。だから男衆がお勝手仕事をすることになります。貧しいなりに、女の地位は高かったんですね。

ところが、機織りも大量生産するようになって仕事がなくなり、瓦製造業にとって代るようになり、女仕事は完全に駆逐されたかんじです。

瓦屋の仕事は力のいる男仕事で女は運搬とか、瓦にふきつけるシンナーをといたりという助手的な仕事しかできない。だから、賃金をみても、男の半分ですね。機織りは年季がいる仕事だし、下ごしらえに時間がかかるけど、瓦屋の仕事は、今日いけば二千四百円になるし、八時間だから楽だと皆言いますけど、一束十二キロの瓦を一日中運ぶんですから、かなり重労働です。でも、この辺で七十すぎの老人以外で、働かないで家にいる人はいませんよ。皆、家計の足しにと働いています。

以前に比べると、お金が入るようになって、一応家を新築しても、また生活上の出費が多いから、憧れの専業主婦にもなれないんです。それでいて、男と女の地位は全体的には逆転してしまったようです。

からめとられる女の力

――よく被差別部落の女の人は強いというようなことが言われますが、それも産業構造の変化と共に変ってきたんですね。

小林　そうですね。それが一番顕著にあらわれているのが、部落の中の瓦屋で成功した上層階級なんですね。瓦屋さんで成功している家というのは奥さんが一切を取りしきるシッカリ者で、渉外にあたる場合が多いんです。学歴も奥さんが女学校、旦那は高等科中退で字もロクに書けないというような縁組みが多いんですね。こういう学歴のアンバランスは、男は農業を継ぐから学校なんか出なくともよいし、教育などすると外に出てしまうからということで、女はそれに比べて、外に嫁にやるから教育だけはとか、手に職をという考えから無理をしても教育は割合つける。ところが、差別があって外との縁組みができないし、女が一人でいると回りが放っておかないので、部落内で縁組みをすることになったからです。

ですから、瓦屋として成功するまでに奥さんの働きが大いに預って力あったわけで、今でも奥さんがいる時といない時とでは瓦の出来具合もちがうというような家もあるほどです。

ところが、いったん成功してお金ができると、やはり男というものは今まで押えつけられた憤懣のはけ口を求めるんでしょうかねえ、外に愛人を作ることが多いんですよ。貧しい時は力を合わせて平等に働いていたんですが……。昔、秩父の機業地に昭和電工がきて、金回りがよくなった地元の男たちが女遊びをするという悲劇が起っていると聞きましたが、何十年か遅れて今、「列島改造ブーム」の波を受けて、新しい形の階級差別が起るなかで、田町にも同じことがでてきたというかんじですね。

私は今、部落の底辺の女の人たちが歩んできた本当の道すじを知りたいと聞き書きをしてるんですが、女の人は総じてあまりホンネを出しません。特に生活のよくなった人は、過去のことを言うのは恥ずかしいという気持が強い。今は有力者と縁組みもできるようになってるから、差別を表面化したくないんですね。私が『おんな三代』を書いた時も「よくもまあ、あんな自分んちの貧乏だったことを書いて、きまり悪がらねえで、よく平気でいられるもんだ。子供たちが可哀そうじゃねえか」という具合です。私が話を聞きにいっても、旦那の方が奥さんの顔色をみながら「カアチャン、今はハア金に困らねえから、あん時のことは、もう話してもいいだんべ…」と聞くような場面にぶつかります。なにせ、四十年代までつづいた食うや食わずの生活のことは話したくないという気持が強いのです。

もちろん、男でも階級によって差別の受けとめ方はちがいますが、まだまだ女の人の意識は遅れているようです。

歴史を掘り起してみると、埼玉県に水平社ができて、間もなく婦人運動が起ったことが水平新聞にでていますが、現状ではまだ女の力は弱いですね。

――十一月二十二日に、東京で初めての関東の被差別部落の女の人たちの「部落問題婦人懇談会」が開かれたと聞きますが、これからの女性運動の踏み台になって欲しいと思っています。

（聞き手・三宅義子）

『女が拓いた解放思想』
――新しい地平編――

▼一月末日発売

一九七四年度の〈新しい地平〉連続セミナー『時代と女』の記録は、一月末日発売の予定です。単行本上梓に当っては、本紙でもたびたびお知らせいたしましたが、諸々の都合で発行予定日がおくれ、一月末日にいよいよ発売の運びとなりました。

全執筆者には、セミナーの時の問題意識をさらに発展させ、新たな研究成果を取り入れて、改めて書きおろしていただき、内容もさらに充実させています。

なお、セミナーで取り上げた時代の殻を食い破った女たちの課題を、日本の女たちのおかれた状況に引きつけて展開した「私にとっての女性解放」という篇を付け加えたことは前号で紹介した通りです。

発売元は柘植書房（東京都港区東麻布一―二三―五、振替・東京43287）です。定価は千二百円（予定）。〈新しい地平〉でも扱います。ご希望の方は送料百四十円を添えてお申込み下さい。

■事務所開設のお知らせ

〈新しい地平〉発足以来、運動の発展のために人の集まる場が欲しいという切実な要求をもっていましたが、このたび、女性解放連絡会議（仮称）という有志の集まりで事務所をもとうということになり、準備をすすめています。

場所は新宿区西大久保二―350バプテスト会館3Fです。

資金、並びに運営方法などについて、よい知恵をおもちの方はご連絡下さい。

申込み方法

□定価は一部百五十円、年間購読料は千円です。

□本紙は隔月刊、年間六回発行です。

□申込み先は郵便振替用紙で、口座番号〈東京2・119178新しい地平〉です。切手、現金で申し込んで下さってもかまいません

□東京駅方面の方は、中央区日本橋2―2―4八重洲歯科医院☎275・0388で扱っておりますので、ご利用下さい。

□『新しい地平』バックナンバーは第2号よりあります。紙代と送料を添えて申し込でいただければ、送ります。

□『新しい地平』は現在、購読料収入のみで賄っておりますが、創刊後三年目に入る今も、あまり人眼にふれないために購読者がふえず、採算はとれていない状態です。そこで、読者の皆様方に購読者拡大のお願いをする次第です。ご一報下されば、見本紙を送りますので、よろしくお願い申し上げます。

購読料が切れた場合は「前金切れ」の通知をしますので、早速お払い込みいただきますように。

編集後記

本号の『新しい地平』はいかがでしたか。『新しい地平』紙は、たんに女性解放の理論を展開する場ではなく、一人ひとりの女たちが抱える課題の中から、あるべき社会を、来るべき未来を展望しようと意図しております。

本紙は創刊以来、三年目に入るわけですが、一号一号文字通り、手探りの中で歩んできたものだという感じがしています。そして、今までに出した九号分をふり返ると、女性解放の問題をどういう視点でとらえるかということについて、そこに何か一本の線のようなものがおぼろ気ながらでも出来かかっているとしたら、それはまさに本紙の作り手と読み手との相互作用によって出来たものであり、その意味で共同作業のたまものだと思います。

今後とも読者の皆さんのご協力をお願いし、『新しい地平』が真の意味で女性解放の機関紙となるようにしてゆきたいと考えています。

鳴物入りで騒がれたマスコミの「国際婦人年」がすぎ去った今こそ、本物の〝われらの女性解放運動〟を始める時ではないかという思いを強くする一九七六年です。

（M）

【新しい地平】　1976年　1月1日発行　発行人　富山妙子　編集人　三宅義子　〒152目黒区東が丘二の13の30の106　☎421・5419

〈新しい地平〉はこのような運動と連帯しています。ご参加ください。

戦争責任を考える会　公開セミナー

敗戦の時点で，日本人民が最低限なさねばならなかった戦争責任の追求。その放置が現状況を作り上げていると私たちは考えます。（会報もあります）

毎月第2土曜日　6時より

連絡先　戦争責任を考える会

たいまつ社内　☎371・1590

アジアの女たちの会

東南アジア，韓国など，日本が企業進出を行っている国々と，日本の関係を，女の視点から考えるグループです。毎月セミナーを開いています。

毎月第3金曜日　6時－9時

連絡先　〈新しい地平〉

☎421・5419

アムネスティ・インターナショナル〈架橋〉グループ

アムネスティ・インターナショナル（国際救援機構）は，ロンドンに本部があり，政治犯の釈放をすすめる国際的な救援組織です。〈架橋〉グループは主として韓国の政治犯釈放運動をすすめています。

申込先　〈架橋〉グループ

〒171.　東京都豊島区池袋3－1555

富山方